

思ひ草

第3号

平成22(2010)年12月22日 発行

サンタとお地蔵様 ～「見つめ、見守る」教師に～

人間開発学部長 新富 康央



学生たちは、「その子なりに」育ってくれているようです。11月は本学部学生たちの有志で、キャンパス周辺のゴミ掃除をはじめてくれました。また、「学生部長杯」というたまブラーザキャンパスにおける体育祭も、彼ら自身が企画し、運営してくれました。

そうした彼らの成長を喜んでいるうちに、今年も「師走」に入りました。街は、クリスマスフェスタで賑わっています。しかし、時に殺風景な光景に見えることもあります。子どもたちが真に求めているプレゼントは、果たして何であろうか、と。「心の手当て(本学部の教育理念の一つ)」、つまり心に手を当てるスキンシップを待っている子どもは、全国にたくさんいるはず。

しかし、先日も、ある先生から辛くなるような話を聞かされました。子どもを褒めた担任教師が、その親に叱られたというのです。学習塾全国模試で上位になり、嬉しそうに報告に来た子どもを、先生はそれなりに元気付けてやろうと声をかけまし

た。「よくがんばったな」。それに対して早速、親からの抗議の電話です。「1位にならないといけない、と言うべきだった」と。

この子が望んでいるクリスマスプレゼントは、ただ一つ。ホッと一息つける安らぎの時間と空間ではないでしょうか。おもちゃでも、かわいいぬいぐるみでも、立派な子ども服でもないはず。

そっと窓の外を眺めると、お地蔵様が鎮座されていました。お地蔵様は、子どもたちの守り神です。ふと懐かしい風景を思い出しました。お地蔵様に見守られ、安心して遊ぶ子どもたちです。その原風景は、TVアニメ「日本昔話」の世界であり、映画「ALWAYS～三丁目の夕日」の世界です。そこには、子どもの成長を「見つめ、見守る」地域の大人たちがいました。本学部の学生達も、教育ボランティアや教育インターンシップを通して、子どもたちと心のスキンシップのできる指導者になる資質を磨いて欲しいと願っています。

子どもが今を生きられるように

教育実践総合センター 副センター長 夏秋 英房



「今日はこんなことがあって楽しかったんだよ!」、「これからこんなことができるようになりたいな」、子どもと話をしているよく聞かれる言葉です。子どもは今を生きる存在であり、また将来へ向けて生きる存在です。子ども自身の思いと願いもここにあります。

そこで気になるのが、現代の子どもは今を十分に生きさせているのだろうか、ということです。とくに遊び不全感が子どもの生活に通奏低音のように潜在しているように思えます。近年取りざたされる「小1プロブレム」にしても、校内・校外における子どもの暴力行為の増加にしても、子ども期を十分に生きさせていない不全感が子どもの荒れやすさにつながっているのではないのでしょうか。

国立青少年教育振興機構が「子どものころの体験は、その後の人生にどんな影響を与えるか」という問題設定の調査結果を先ごろ発表しました。その結果の1つが、子どものころの体験量の差が、大人になってからの活力(やる気や学習意欲)に結びついているというものでした。子どもの生活体験の基盤にある

ものはやはり遊びでしょう。

先日、青葉区内の保育所と幼稚園、小学校の連携のための会議に当センターの全員が参加しました。子どもがどのような特色をもった園で育ってきたのか、子どもの発達環境はどのようなものであり、今直面している発達課題はどのようなものであるのか。また、児童となってからどのような生活とカリキュラムが用意されているのか、卒園した子どもたちがどのような学校生活と発達の過程をたどっているのか。乳幼児期から児童期にかけての子どもの育ちについて保育と教育の関係者が相互に理解し合い情報を共有していくことは、双方にとって大切な手がかりとなることでしょう。

そのときに、この子どもはどれほど遊びきれてきたのか、子どもとして充実した生活を送ってきたのか、という視点は重要だと思えます。何もかもが目的合理的にPDCAサイクルで図られる時代ですが、大人が図りきれない子どもの「今」の自由な遊びこそ尊重され保障されるべきものだと思います。

教育実践総合センター事業の主な取り組み

本センターは、「教育」・「研究」・「社会貢献」の三分野における実践研究指導センターとして、教育インターンシップや教育実習等の支援を主に行う「学生支援領域」と、地域の教育関係諸機関や現職教員との連携の支援を主に行う「地域教育支援領域」について事業を行っています。後期の活動を紹介します。

教育インターンシップ

学校現場での実習継続中です！

5月から始まった教育インターンシップの実習、それぞれの幼稚園や学校現場で、先生方や子どもたちの姿から多くのことを学ばせていただいています。

頼りにされる人に

鴨志田第一小学校 校長 持丸 隆一

本年度から教育インターンシップが始まり、本校でも國學院大学の学生を受け入れています。昨今の社会情勢の中で、教員の能力として様々なものが求められるようになり、教育実習以外の社会体験が必要とされてきています。これらの背景には、今までの教育実習が教員としての技能、特に指導技術や学級経営の能力を養うことに主眼が置かれており、社会人としての資質の育成が十分ではないのではないかとこの考えがあると思われま

す。インターンシップのよさは、実際の社会、仕事を体験することにあります。早い段階で学校現場を体験し、社会人として在り方、教職員としての生き方を学ぶということにあります。大学以外の場として初めて訪れる職場ですから、一からの人間関係の構築が第一の課題として挙げられます。当初は、何も分からず、まさに右往左往していた学生が、経験を重ねる中で、次第に自分で考え、職員に許可を得て動き出す姿を目にすると成長を感じます。長期にわたり、継続的に児童にかかわることによって指導者としての立ち位置なども身に付けていきます。このような経験を重ねる中で職場も学生に対して次第に信頼感をもち、仕事を頼むようになります。どんな仕事についても信頼される人、頼りにされる人は、大切にされ、その仕事を長く続けることが出来ます。そんな人を育てるインターンシップにしていきたいと思

延長保育の時間の中で

初等教育学科 2年 松井 悠

私は4ヶ月間、あざみ野白ゆり幼稚園に通いました。幼稚園教育を目指しているのと現在の幼稚園がどのような活動をしているのかが知りたくて、幼稚園に通うことを決めました。最初は心細く、幼稚園の子どもや先生方と馴染めるか不安でした。初めての訪問では、子どもに話しかけてもなかなか反応してくれず、一緒に遊ぶこともできませんでした。でも、絵本の読み聞かせや一緒に絵を描く活動などを積み重ねるにしたがって子どもから声をかけてくれるようになり、今では教室に入ると抱きついて来てくれる子どももできました。何か一つでも得意なことを持っている子どもとかわりやすくなるのだと感じました。幼稚園に通うことで、子どもとのかかわり方について学び、たとえば絵本を読むにしてもどのように読むと喜ぶかなど経験を通して知ることができました。また、一番よかったことは、実際の教育現場に自分が行き体験することで幼稚園教諭への夢がより大きなものになったことだと思います。



みんなで力を合わせて
清掃活動

(黒須田小学校。佐藤成豪さん、手塚太一さん実習中の様子)



教育インターンシップ

学校現場で行動して、心で感じて、学ぶ。

教えることで教えられること

初等教育学科 2年 渡邊 宏樹

私は、毎週水曜日に、恩田小学校の特別支援学級で活動しています。毎週毎週、私が学校に行くと、子どもたちはとても喜んでくれます。日々の内容としては、一緒に給食を食べたり昼休みに遊んだり、学習の支援をしたり教えたりしています。また、4年生や特別支援学級の宿泊体験学習、運動会にも参加させていただきました。宿泊体験学習や運動会の行事では、初めて教師という立場で参加し、この経験を通して教師の仕事の内容や大変さや喜びを実感することができました。日々の教育インターンシップの活動でも子どもたちとかかわる中で、うまくいくこともうまくいかないこともたくさんあります。教えることで子どもたちから学ぶこと、教わることがたくさんあることに気づきました。教師としてどのような対応をとるべきかということも勉強になっています。

だからこそ、教職を目指すならば、教育実習だけでなく、教育インターンシップの活動が必要だと感じています。これらの経験を生かして、あらゆる面でよい教師になりたいと考えています。

現場に出てこそ分かること

初等教育学科 2年 嶋村 諒一

私は、母校である藤が丘小学校で5年生を担当しています。いざ現場に行くと、今までこうであろうと思っていたことが、意外と違うこともあります。以前、算数の授業で、一人の子どもにかかわりました。その子は、勉強は苦手ではないけれど、やる気がなかなか出ず、授業中に違うことをしていることが多かったようでした。私は、やる気がない様子なので、勉強が好きではないのだろうと感じていました。また、ほぼマンツーマンで勉強を教えられている状況に苦を感じないか心配していました。しかし、ひと通り教え終わって、次の問題を解く時間に再び教えに行くと、その子は満面の笑みで「先生、さっきはありがとう。」と言ってくれたのです。私は不安を感じていた分、その言葉がものすごくうれしくてたまりませんでした。教えるたびに、その子の様子は変わり、自ら手を挙げてみんなの前で発表までしました。その時私は、授業に気持ちが向いていないように見えても、問題が解けるようになるとこんなに嬉しそうになりやる気も出てくるのだなと感じました。それから、私は偏見で見ないように心がけ、視野を広くもつことができてきました。他の面でも、これはこうと決めつけることなく、幅広い視野で活動していきたいと考えています。

教育ボランティア活動

教育ボランティアでもさまざまな場面で実習を。

子どもの気持ちに気づくこと ～跳び箱の授業から

健康体育学科 2年 坪川 真央

私は、谷本小学校のアシスタントティーチャーとして、週に3回3年生の体育の授業の支援を行いました。模範の動きを示したり、授業の指導を行ったりしました。

跳び箱の授業で、まだ一度も跳び箱を跳べない子がいました。怖さを超えたら跳び箱を好きになると思い、私は、「思いっきり助走してジャンプすればできるよ。」とその子にアドバイスしました。けれど、その子はなかなか跳ぶことができません。私は、本当に跳びたいのかな、と思ってしまいました。しばらくして、私のその考えは間違っていたことに気づきました。私は小さいころからスポーツをする経験が多かったので、やればできるという考えしかもっていなかったのだと思いました。その子は、跳びたくないわけではなく、どうすれば跳べるのかが分からなかったのです。子どもたちは出来たら嬉しそうに報告してくれました。

今回の経験で感じたことは、自分が今までやってきた感覚

だけで教えるのでは伝わらないことがあるということです。

その子の立場に立ちいろいろな方法や表現の仕方教えられるような人になる準備を今からしていきたいと思いません。

嶮山小学校でのボランティア経験から

初等教育学科 1年 大澤 奈々

運動会当日と運動会前の練習日に、嶮山小学校でボランティアとして活動しました。主に3年生の子どもたちの支援をしつつ、大玉送りなどにも参加させていただきました。現場では、先生に指示されたことだけでなく、子どもがけがをしないように見守ったり、進行に気を配ったりと、やらなければならないことがたくさんありました。小学生の時はわかっていませんでしたが、これほど先生たちがいろいろな面に目を配っていたということに気づき、その大変さも実感しました。自分の目で見て、感じて、経験していくことがこの先とても役立つと思うので、今回の経験を生かしつつ、他の行事等にも参加してみたいと思いました。

教師力形成サポート「未来塾」

後期「未来塾」での状況をお知らせします。

教育実践総合センター「未来塾」 柔道基礎力養成講座 一昇段をめざして

健康体育学科 教授 上口 孝文

将来、保健体育教諭をめざす学生、初等教育学科の所属で、昇段を希望する学生を対象にして、「柔道基礎力養成講座」を開講した。

柔道の昇段審査は、初段は、「礼法」、「受身」、「投の形(手技、腰技、足技)」、「乱取」での習熟度を総合的に審査される。弐段は、初段の審査項目に「投の形(真捨身技、横捨身技)」が追加されて審査される。参段は、弐段の審査項目に「固の形」が加わり「乱取」とともに総合的に審査される。

本講座の受講登録者は、初等教育学科2名(弐段昇段希望者1名、初段昇段希望者1名)、健康体育学科11名(参段昇段希望者2名、弐段昇段希望者1名、初段昇段希望者8名)であった。受講学生数は、前期8回の講座で延べ56名、後期7回の講座で延べ43名であった。

初段、弐段の審査対象になる学生には、柔道の基本的な動作である礼法、受身、投の形、抑込技、投げ技から抑込技への変化などを中心に指導した。参段の審査対象者には、真捨身技、横捨身技、固の形を中心に、映像を参考にして練習してもらった。受講学生の経験年数、習熟度に大きな差があり、参段の審査対象者には十分な指導ができなかったことが悔やまれる。後期では、他の科目と重複したため受講できず昇段を来年度に持ち越した学生がいたことは残念であった。11月21日の審査では、審査を受けた参段2名、初段3名全員が昇段した。

「体験から経験へ、すべては体験から始まる」

初等教育学科 講師 寺本 貴啓

教員企画の講座である未来塾として、科学体験の充実を目指し、「でんじろうさんになれる!科学実験あそび」というテーマのもと、計4回の科学実験教室を実施した。今回は、教師になったときに使えるちょっとした手品や「静電気実験」、風船で動物を作るなどの「バルーンアート」や「ドライアイスの実験」など、普段の講義の中で扱えない内容を行った。このような内容は、本やテレビで見ているときは「わかった」という気持ちになるだろう。しかし、時間が経つと細かいところまでは十分に覚えておらず、同じように実践できないことが多い。つまり、見たときは「わかったつもり」になっているのである。

これまでの調査で、理科は他の教科と違い、教師経験を重ねただけでは得意になるものではないことがわかっている。このことは、理科は教師自身ができるだけ早いうちから、知識のみならず技能もしっかりと身に付け、実験などに対する不安感を無くしていかなければならないことを意味している。つまり「見る」→「体験」→(繰り返す)→「経験」という過程を通して初めて、教師としての本当の力になるのである。教師の卵たちには、「まずは何でもやってみる」という積極性や、幅の広い好奇心をもつことを願いたい。



青葉区 幼・保・小教育交流事業「子育て講演会」

地域の先生方との連携を大切に。



今年度の青葉区幼・保・小交流事業(委員長 新石川小学校の小林暁美校長先生)が、11月19日に開催されました。パネラーとして、横浜市教育委員会萩原規彦主任指導主事、地域療育センター青葉の遠藤剛課長とともに本学夏秋英房副センター長が、また、特別講師として本学田沼茂紀センター長が参加しました。地域の先生方と共にテーマの「保育園・幼稚園から小学校への『つなぎ』における諸課題について」の話し合い連携を深めるよい機会となりました。